

自然遊学館 だより

1995春 (No. 6)

1995. 5. 20

シリーズ『貝塚の昆虫(4)』

森の舞姫ウスイロカザリバ

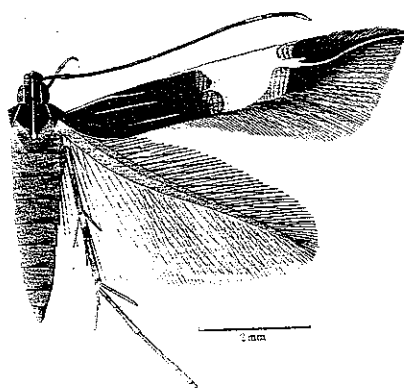
6月中旬から下旬にかけて林床にササがある森の中に入ってみよう。ササの葉の上に眼を凝らして見ると、長さ7mm程の細長いはねをもった、黒っぽいガがいることに気付くであろう。1匹みつけると、あつちこつちにもいることがわかる。このガの動作をよく見てみると面白いことに気付く。このガは決して直線状に歩くことはしない。腰を左右に振って波形を描きながら葉上を歩いている。いっとき波状の運動をしたのち、今度は頭部を中心に置いて円を描く動作をする。あたかもウィンナーワルツでも踊っているような身のしぐさである。また飛び方も一風変わっている。直線的に飛ぶことなく、上下にカーブを描きながらひょいひょいと飛ぶ。このガは考えてみると、わたしを現在の専門(ハモグリガの分類、生態)に導入してくれた最初のカガである。

顕微鏡下でガの美しさ発見

このガはカザリバガ科の仲間、かつてヨーロッパの学者が、この仲間のガを見てあまりの美しさ感動したというだけあって、他のガ類に見られないシックな美しさをもっている。この類はわが国に40種あまりいるが、最も普通に林内で見

られるのがこのウスイロカザリバで、学名を *Cosmopterix victor* という。Victorとは勝利者という意味で、命名者(Stringer)はこの種の素敵な容姿を勝利者と考えたのであろう。

このウスイロカザリバははねを広げて12~13mm程の小型のカガではねは幾分オリーブ色を帯びた黒色で、はねの中央に黄色の横帯をもち、この横帯をはさんで銀紋があり、はねの基方に3本、外方に1本の銀白線条が走り、後者ははねの先端部にある白点に接続する。色の美しさばかりでなく、前後のはねが細いのも特徴の一つで、はねのふちから長い縁毛がレースのように多数出ている。



ウスイロカザリバの成虫
(右半分)

わたしがかつて福岡県と大分県の県境にある英彦山の中腹(標高670m)にある九大付属彦山生物

学研究所に勤めていたとき、当時の研究所長故安松京三博士（ハチ類の権威）から聞いた話であるが、博士は研究所の裏山でこのエレガントなガを発見、福岡の九州大学の構内に生えているヤダケに何とかして移殖しようと試みたが成功しなかったといっておられた。

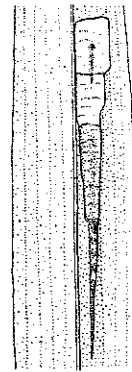
貝塚の産地

このガは日本全国に広く分布していて、貝塚では和泉葛城山に行けば見られる。麓の方にもいるが、とくに山頂付近のブナ林の下に生えているササに多い。4～5月にこの林中に入ってみる。空気はひんやりとしていて時折小鳥のチチという鳴声が聞かれる。林床を覆っているミヤコザサの葉を注意してみると、葉の表面に枯れたような白褐色の細長い斑紋がついている。基部が細く先の方が幅広い楽器のトランペットのような形をしている。この葉を一枚付け根からちぎって空にかざしてみると、トランペットの先端部に何やらうごめいている小虫が見える。これがこのガの幼虫で、幼虫は葉の中の1/10mm位の厚さの組織に潜り葉肉を食べているのである。幼虫は葉の組織から外に出ると死んでしまう。このような潜り跡を潜孔あるいはマイン (mine) という。マインの中を透かして見ると、ほとんど糞が入っていないことが分かる。この幼虫は奇麗好きで、マインの裏面に小さな裂孔を作り、ここから腹端を出して糞をマインの外に捨てるのである。なれると、このようなマインがあっちにもこっちにも見つかる。ときには別の特徴をもったマインも見つかる。これは別種のものである。この幼虫は5月下旬頃になると、マインの中でさなぎになり、6月中下旬に成虫となって飛び出すので、その頃この地を訪れると成

虫を多数見ることができる。

幼虫の潜り跡に対する俗信

笹の葉の「鉄砲虫」の俗信なる記事が“植物及動物”（湯浅、菊地、1939）に出ているので、その大要を述べる。「栃木県の南部地方では「テッポウムシ」という虫の食い痕の笹の葉1000枚を集めて大神宮に納めると弾丸除けになるというので、出征兵士のために、これを集めることが流行していた」という。ここでいうテッポウムシとはカミキリムシの幼虫のことではなく、ウスイロカザリバの幼虫の潜葉痕のことで、その形が鉄砲の形に似ているので、そう呼んだのである。1939年（昭和14）という、この2年前に中国で蘆溝橋事件が起き、日中間で戦争状態に突入し、風雲急を告げた時代であったのである。



ササの葉に作られたウスイロカザリバ幼虫の穿孔
(中の幼虫が透けて見える)

(黒子 浩)

アメンボの話（2）

ある生物が何の仲間かという、生物の親類関係を調べるには、体の特徴をほかの生物とくらべてみなければなりません。アメンボが何の仲間かを知るために、アメンボの身体検査をしてみます。

・アメンボの顔

まず、アメンボの顔を見てみましょう（図1）。

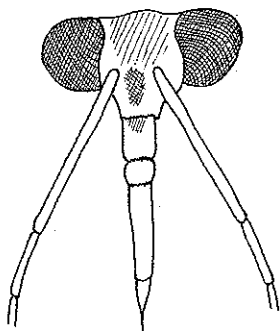


図1：アメンボの顔

最初に目につくのは、ゾウの鼻のようなものです。これは、鼻でしょうか？ 私たちの鼻は、匂いをかいだり、呼吸するとき、肺に入る空気のごみを取り除いたりするものです。しかし、昆虫は、胸や腹にある「気門」という器官です呼吸します。ですから、ゾウの鼻のようなものは鼻ではありません。鼻でないとすると、何を思いつきますか？

昆虫の顔に、ごく普通に付いているもので思いつくのは口です。アメンボの顔のゾウの鼻のようなものは、細長く伸びた口です。

細長く伸びた口をした昆虫を思い浮かべてみましょう。私たちの血を吸うカ、それにセミやカメムシもストローのような口です。チョウもストローのような口で花の蜜を吸いますが、口はゼンマイのようにぐるぐる巻いています。アメンボの口とはずいぶん構造が違いそうなので、とりあえず

チョウははずしておきます。カ、セミ、カメムシのなかにアメンボに近い親類がいそうです。

・アメンボの翅（はね）

アメンボには翅があったのでしょうか？ アメンボをつかまえて調べたけれどもアメンボには翅がなかった、という人がいるかもしれません。たしかに、翅のない「アメンボ」がいます。それは翅のない種類だったのかもしれませんが。しかし、大部分のアメンボの成虫には翅があります。

アメンボは背中に翅をたたんでいます。広げると4枚の翅があります。前の大きい方の翅を「前翅」、後ろの小さい方の翅を「後翅」といいます。この翅をはばたかせて、アメンボは空を飛べます。

アメンボの翅は4枚ありました。カは前翅だけしかなくて、翅は2枚です。セミの翅は4枚、カメムシの翅も4枚です。カの翅は2枚ですから、アメンボと近い仲間ではないようです。

アメンボは、セミかカメムシに近い仲間のようなのです。じつは、セミとカメムシも近い仲間なのでしょう。では、アメンボは、セミとカメムシのどちらと、より近い仲間なのでしょうか？

・アメンボのおい

アメンボをつかまえたら、においをかいでもみましょう。においを感じないこともありますが、たいていのアメンボはにおいを出します。アメンボの腹側を見ると、足の付け根の間に「へそ」のようなのがみえます。「へそ」から、液体が出ていることもあります。どうやら、この「へそ」から、においを出しているようです。

セミとカメムシでは、カメムシのほうが、にお

いを出すことで知られています。ですから、アメンボはカメムシにより近い仲間です。というより、「水面で生活するようになったカメムシ」というほうがいいかもしれません。

・アメンボの語源

カメムシを出すにおいては、よく「くさい」といわれます。アメンボにおいてはカメムシの匂いとは違って「甘い」においがします。この匂いが、食べ物の飴の匂いに似ているので飴ン坊（あめんぼう）と呼ぶようになり、それが「アメンボ」という名前の語源だという説があります。他にも色々な説があるようですが、どれが本当なのか私には分かりません。ただ、「飴ン坊」説に説得力があるように思います。

「アメンボ」という呼び名ができたのがいつなのか、はっきりした時期は知りませんが、少なくとも100年以上前のことです。50～60年前でも、東京や大阪のような都会にも、たくさんの田んぼがありました。家の近くには田んぼや池や小川があり、そんな水辺で遊んでいると、アメンボにはしょっちゅう出会ったはずです。水辺で遊んだり虫取りをするのは、たいてい子供たちだったでしょう。だから「アメンボ」という呼び名をつけたのは子供たちだと思うのです。最近まで、お腹いっぱいになるまで食事できる子供はほとんどいませんでした。アメンボをつかまえたときに、甘いにおいがふんとしたら、お腹を空かせた子供は、きっと飴を食べたときのことを思い出しただろうと思うのです。それで「飴ン坊」と呼んだ、と、私は勝手に想像しています。

（中谷 憲一）

市民の森生き物観察会

3月26日(日)

一日一日と春を感じる時期、植物や虫など、春の準備はできているかしら。心配した雨もあがり、まずまずの天気。

遊学館を出て、駐車場を通り水生植物の池へ。その後子供の広場横のフェンス沿いと、市民の森をぐるりと回って生き物を観察する。15分もあれば充分ひと回りできますが、どんなところに何かがあるか見て行くと1時間なんてアッという間です。冬の間なんとなく寒々と殺風景な公園も、春の草花が顔をだすだけでうきうきとした気分になれるので、不思議です。虫たちはまだ寒いのかあまり活動していません。

植物

タネツケバナ、アカカタバミ、スズメノカタビラ
オオアレチノギクのロゼット、オニタビラコ、チチコグサモドキ、オランダミミナグサ、ツメクサ
ノボロギク、オオイヌノフグリ、フラサバソウ、ハナイバナ、キュウリグサ、スギナ（ツクシ）、コメツブウマゴヤシ

昆虫

アオバアリガタハネカクシ
ナガカメムシの一種

（湯浅 幸子）

和自動車道の下の「山の口橋」付近は、深い溪谷になっており、それを過ぎると奥出池を中心とした盆地状の地形になる。稲谷川もゆるやかに蛇行し澄み切った水の流れであった。上流の観察を終え水間寺まで引き返し、午後4時解散した。

(上久保 文貴)

自然遊学館新館長 上久保 文貴 (カキ保 文貴)

プロフィール

植物分類生態

阪南理科教育研究会副会長

あったかい雰囲気、ひかえめで実行の器用 (特に大工仕事は迅速あざやか)

桂米朝に似ている?

プレイパーク (親と子のネットワーク) を訪ねて

5月3日~5月5日

善兵衛ランドの裏手、通称『蓮池さんの原っぱ』でプレイパークが開催される。東京羽根木のプレイパークをお手本としたこの会、『貝塚市・親と子のネットワーク』が主催しているが、お誘いを受けたものの、遊学館の職員が関われるものかどうか、まずは上久保館長と白木が覗いてみる。

子供たちを自由に遊ばせる、と聞いていたので、器用な館長はタケトンボを作り、私は見てるだけ。

そのうちお母さん達の方が気を使って、「子供は遊びに夢中で付いてこないでしょうが、私たちに植物を教えて下さい」。

タケノコでお馴染みのモウソウダケは、節部に2本線があり、ハチクとして食べるマダケとは区別できる。タケの生長点は節部にあり、そのため

節と節の間が伸びる。タケノコとして土中から出てきたときの太さのままタケになる。

「知らなかった……へえ……」お母さんたち。

セイタカアワダチソウ、ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク、アメリカフウロウなど帰化植物が入ってきている反面、カンサイタンポポがたくさん咲いていて、セイヨウタンポポが見られず、両者が比較できない。ハハコグサが咲いているが、最近何処でも見かけるチチコグサモドキがないことなど、この地は比較的自然度が高いようである。

カラスノエンドウ、カスマグサは花盛り。

草笛遊びは、スズメノテッポウの葉、カラスノエンドウの実、カンサイタンポポの花軸。

キュウリグサは葉を揉んでキュウリの匂いを確認、同時に花部をルーペで拡大すると、ヤエムグラの花とともに、気品があって人気上昇。

美味しいクサイチゴは、今年は遅いようでもまだ色づかず、イヌビワの実を試食するには若かった。

かぶれやすい人はヌルデに注意。

アカメガシワは名前の通り、ちょうど赤い芽を出したところ。

翌日4日は、黒子顧問と白木が参加。

昆虫となると子供たちもついてきて、アキニレの虫こぶからアリマキをほじくり出したり、ガかハエか見分けるために、幼虫をルーペで覗きながら、足の数を数えたりした。

おみやげにゴマダラチョウの食草であるエノキ、エゾエノキの苗を掘り、自然遊学館に植えた。将来自然遊学館でゴマダラチョウが舞えば、プレイパークとの出会いを思い起こすことだろう。

(白木 江都子)

近木川探検（上流、馬場地区）

4月22日（土）

昨夜来の雨で、野外での実施が危ぶまれたが、開校式を終える頃には、ほぼ雨もやんできた。探検隊ということで、多少の雨は覚悟して予定通り、10時30分山手公民館を出発。参加者は、46名。水間公園駐車場まで全員車で移動する。

水間公園裏山を通り、遍照寺へ向かう。この付近は、クヌギ・アベマキを中心にヤマザクラ・ソヨゴ・ヒサカキ・シャシャンボなどのみられる二次林で、その中には、モチノキ・ヤマモモ・ヤブニッケイ・ナナメノキ・クロバイ・ヤブツバキ・アオキなど、かつてのこの地の照葉樹林の名残を伝えると思われる樹種も見られる。

遍照寺裏山の墓地では、シラホシコヤガ、アリジゴク（ウスバカゲロウ）の観察やササの葉の中に幼虫が住んでいるウスイロカザリバなどの観察をした。

遍照寺橋を渡り、梶谷川に沿って上流へ向かう上出橋を過ぎ、その上流二つ目の無名の橋の所で昼食をとる。歩いている間は、雨もやんでいたが、昼食の間は雨にあい傘をさして食事をとる。

付近は水田になっており、路傍の植物も豊富で色とりどりの春の花をさかせている。

（開花中のもの）

スイバ・カンサイタンポポ・オオイヌノフグリ・ホトケノザ・ナズナ・スズメノカタビラ・ハコベノゲシ・カズノコグサ・セトガヤ・ヒメウス・オニタビラコ・スズメノヤリ・ノアザミ・オランダミミナグサ・タチイヌノフグリ・ウマゴヤシ・ウマノアシガタ・クサイチゴ・コオニタビラコ・キウリグサ・タネツケバナ・カラスノエンドウ・スズメノエンドウ・カスマグサ・オキジムシロ・カ

キドウシ・ムラサキサギゴケ・オオジシバリ

（未開花のもの）

セイタカアワダチソウ・テイカカズラ・ヤエムグラ・カラムシ・ヨモギ・オオバコ・ススキ・ホソイ・アメリカフウロ・ジャノヒゲ・オオアレチノギク・オニノゲシ・ギシギシ・ドクダミ・ヒガンバナ・スギナ・ホラシノブ

この付近での川の植物（川床及び川岸の斜面）は、次のようなものであった。

セキショウ・オオバタネツケバナ・チャルメルソウ・ドクダミ・スイバ・ダイコンソウ・カキドウシ・ヨモギ・オオアレチノギク・ミツバ・イタドリ・ノカンゾウ・タチツボスミレ・オニヤブソテツ・イノモトソウ・オオバノイノモトソウ・ナキリスゲ・スイカズラ・ゼンマイ・ショウジョウバカマ・サジラン・サンショウソウ・フモトシダ・アオキ・マルバウツギ・ビナンカズラ・ナンテン・シュロ・タラヨウ・アラカシ・ヤブツバキ・マンリョウ

この付近は、標高80m、流れは速く水もきれいで、水辺にはセキショウ・オオバタネツケバナ・チャルメルソウ・サンショウソウ・サジランなど、清流の水辺を成育地とする植物がみられる。

帰化植物の侵入は、オオアレチノギク一種のみである。

川岸は急斜面になっており、タラヨウ・ヤブツバキ・アオキ・マンリョウなど、かつての植生の名残を伝えると思われる樹種が残されている。

目に付く動物は、コイ・フナ・カワムツ・カワニナ・アメンボ・ハクセキレイ・ウグイス・ヒヨドリ・キジバト・カワラヒバ・スズメ・ツバメであった。

午後は奥出池周辺のダム予定地跡まで歩く。阪

グリーンカレッジ（花と緑の文化大学）

入学案内

グリーンカレッジは自然遊学館に設置された、花と緑の文化大学です。

「自然大好き人間の育成」を目指します。

自然に対する基礎知識を身につけ、自然の中に入って遊び観察し、人と自然の共生を考えていきます。

基礎コース

自然に対する基礎知識を学びます。

ファミリーコースの行事を実施するために、自然遊学館職員とともに下見に出かけたり、グリーンカレッジを応援して下さる先生方の講義を受けたりします。年度の終わりに研究結果発表会があります。

ファミリーコース

月1回 原則として第4土曜日に、親子で参加してもらえます。もちろん大人だけでもかまいません。今年、近木川探検「きれいな近木川を取り戻そう」をメインテーマにおいて、行事を組んでいます。行事に参加したときは、調査したこと、学んだことなどを記録に残し、年度の終わりに発表会をおこないます。

ボランティアコース

「花いっぱい運動」や美化運動など市民運動に参加し、地域緑化運動のリーダーを養成します。

コースの一例（ファミリーコース）

- 4/22(土) 開校式 山手地区公民館
春のハイキング 近木川探検隊 上流（馬場地区）
- 5/27(土) 近木川探検隊 中流（清水大師付近）
- 6/17(土) 初心者のための採集講座
- 6/24(土) ～6/25(日)
そぶら夏季自然学習（府立少年自然の家）
近木川探検隊 上流（ホタルの夕べ）
- 7/22(土) 近木川探検隊 河口
稚魚放流（ヒラメ・クルマエビ・チヌなど）
- 8/20(日) 採集物の名前を調べる会
近木川マップづくり
- 9/23(土) 近木川探検隊 下流
- 9/24(日) ～10/22(日) 南松尾中学標本展示
- 9/24(日) マゴンドウクジラ組立完成披露
- 10/8(日) 近木川探検隊 河口の生物（山西良平）
- 10/ 緑化フェア・南松尾中学標本展示終了
- 11/25(土) ヨモギを摘んで「よもぎもちをつこう」
- 12/23(土) 植物をつかった工作（蔓、パピルス）
- 1/27(土) スライドで見る自然（広渡俊哉）
- 2/24(土) 近木川調査結果発表会・閉校式

グリーンカレッジの申込み、
お問い合わせは 自然遊学館まで

自然遊学館だより1995春（No. 6）

発行 1995. 5. 20
購読 自然遊学館
併 貝部二色3丁目26-1
☎ 0724-31-8457
